

原作者の池波さんが、「鬼平犯科帳」の執筆にあたってたびたび利用したのが、「江戸切絵図」と「江戸名所図会」、「江戸買物獨案内」である。

なかでも、「江戸名所図会」は、日に一度は見たという愛用の地誌で、そこに描かれている神社仏閣や名所古跡、江戸庶民の生活や風俗は、そのまま時代小説を創るきっかけになったようである。

確かに、「凄い…」。

この「江戸名所図会」だけは、見るたびに「凄いものだ…」と感心させられる。これだけ眺めて暮らしても、一生、退屈することははない。

『鬼平犯科帳』の原作の舞台に登場して来る『江戸名所図会』は、第一巻第七話「座頭と猿」の「愛宕権現」を初めとして、第七巻・第七話「盗賊婚礼」の駒込神明宮と料理屋「瓢箪屋」の描写、第九巻・第四話「本門寺暮雪」であの「凄い奴」が入って行った麻布一本松の茶店「ふじ岡」の描写、第十五巻・特別長篇「雲竜剣」の丸子宿と最明寺の描写、第二十巻・第四話「怨恨」の飛鳥明神と千住の小塚原の描写、第二十二

宕下の医師・牧野家へ療治に出かけた帰り道、「ちよつと、権現様にお参りして…」と話がすすみ、女坂を通りかかる。つづいて、茶店「井筒」に立ち寄り、「おその」と出会う。「いい女だ…」ということになって、話がどんどん膨らんで行く。

こんなふうにして、座頭・彦の市と「おその」を主人公にして、これに盗賊「尾君子小僧・徳太郎」をからめ、第一巻・第七話「座頭と猿」という物語が創られて行ったのではないだろうか…。



供覧：国立国会図書館デジタルコレクションより転載
愛宕権現の「江戸名所図会」（二三〇ページ）



文
松本英亜

text by Hidesugu Matsumoto

『鬼平犯科帳』細見

第九回

『江戸名所図会』

〈第一巻・第七話「座頭と猿」〉

巻・特別長篇「迷路」の三開稲荷社、同じ「迷路」の鉄砲洲・船松町の葉種屋「笹田屋」と佃島の住吉神社の描写、第二十三巻・特別長篇「炎の色」の湯島天神境内の様子、第二十四巻・第一話「女密偵女賊」の天現寺と毘沙門堂あたりの描写などがある。

これらの挿絵の中に、盗賊や密偵、女を立たせ、これをさらに広域に発展させて、「江戸切絵図」の上を縦横に動かして行く、物語の全体像と進行状態がよく理解できるようになる。

例えば、「座頭と猿」では、芝の愛宕権現の描写に、この「江戸名所図会」が使われているが、「愛宕山権現社」は、三つの挿絵から構成されている。其一が「愛宕下真福寺薬師堂」で、其二が「愛宕社總門」、其三が「山上 愛宕山権現本社図」となっている。其一と其二は続画である。

池波さんは、ある日、「愛宕山権現社」の三枚の挿絵をながめていて、其二「愛宕社總門」の絵にひらめく…。

愛宕山の女坂に、茶店「井筒」を想定すると、ここに茶汲女「おその」を働かせる…。すると…、もうこれだけで、次々と連想が走り、この日、座頭・彦の市が、愛



Profile

1942年東京生まれ。
東邦大学医学部卒業。医学博士。
医療法人社団同友会 顧問。
著書に『小さな旅 鬼平犯科帳ゆかりの地を訪ねて』
第一部～第五部（小学館スクウェア）。



「小さな旅」鬼平犯科帳
ゆかりの地を訪ねて 第5部
小学館スクウェア
定価・本体価格 1,800円（＋税）
好評発売中